

縄文時代の剥片剥離手法

—酒呑場遺跡出土黒曜石石核の分析から—

保坂康夫

1. はじめに
2. 資料の由来

3. 石核の観察記載
4. 剥片剥離手法の復原

5. まとめと展望

1. はじめに

縄文時代の剥片剥離手法については、田中英司氏（田中1977）、山田昌久氏（山田1985）、大工原豊氏（大工原1996）、町田勝則氏（町田1996）、竹広文明氏（竹広2003）などの研究や提言がある。しかし、中部山岳地域の黒曜石の剥片剥離について分析したものは少ない。近年、黒曜石原産地の調査研究が進んでおり、原産地における黒曜石原石の剥片剥離の状況が究明されつつある（長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団2000）。しかし、原石の消費地ともいべき一般集落での実態は言及されることが少ない。これは、集落遺跡で、剥片剥離工程を復元できるような接合資料に恵まれないのが原因と思われる。黒曜石はそもそも接合資料探索の前提となる母岩分類がむずかしいといわれているが、剥片をトレース台の上に並べて透過光で観察することで、母岩分類が比較的容易な石材である。こうした方法で縄文時代の剥片の母岩分類や接合を試みたことがあるが（保坂1990など）、1母岩の構成点数が2～3点と少なくなることから、ひとつの原石に対する剥離数が非常に僅少であったのが実態であり、接合資料を得ることそのものが非常に困難な対象と思われた。黒曜石の剥片剥離手法復元は、石核や剥片そのものの分析からあえて類推して行かない進まないというのが実情であろう。

そこでその手がかりとすべく、酒呑場遺跡の黒曜石石核を中心とする資料を分析したい。酒呑場遺跡は、北杜市長坂町にある縄文時代集落で山梨県埋蔵文化財センターや長坂町教育委員会が1994～2001年にかけて発掘調査した。縄文時代前期後半の諸磯式期から集落が形成されはじめ、中期末の曾利式期まで継続的に住居の構築がみられる。集落は諸磯式期、五領ヶ台式期～井戸尻式期、曾利式期の3段階で占拠地を変えており、調査された住居跡は総数239軒に達する。報告書はすでに刊行されているが（山梨県教育委員会・山梨県農務部1997ほか）、黒曜石石核については未報告であった。

ここではまず前期後半の諸磯式期の資料を分析するが、諸磯式期は酒呑場集落の起点の時期であり、県内の特に甲

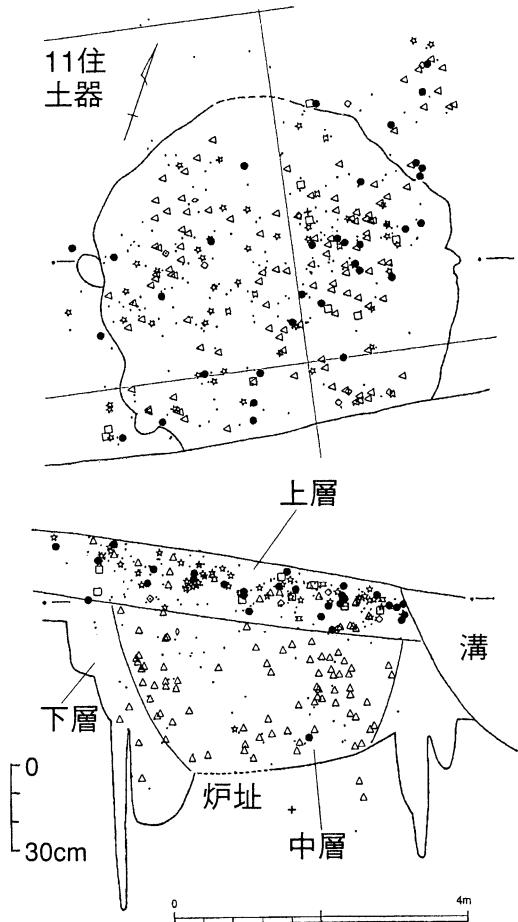
府盆地周辺の縄文時代遺跡の中でも遺跡数の増加する時期である。特に諸磯b2式段階からの住居跡の増加が著しく、各地に集落を形成し、北杜市天神遺跡や笛吹市花鳥山遺跡などのように、大型集落も形成されるようになる。この地域で開花する縄文中期文化形成の起点とも考えられる。そうした位置付けのできる諸磯式期の剥片剥離のありかたをまず観察し、それをスタンダードとして、五領ヶ台式期から曾利式期までの展開についても見通してみたい。

2. 資料の由来

今回黒曜石製石核の実測図を提示するのは、酒呑場遺跡I区の11号住居跡出土品である。11号住居跡の大型土器片は諸磯b式期で、浮線文を多用するものが主体を占め、爪形文を多用するものが若干含まれることから、諸磯b2式を中心とした諸磯b1式から諸磯b3式までの範囲と思われる。大形土器片の示す時期幅は限定されるものの、縄文時代の住居跡出土遺物は覆土中出土が中心であり、他の時期の遺物と混在することが多いため、特に石器について時期判定が難しい。そこで酒呑場遺跡I区では、以下の方法で遺物の垂直分布を検討することでこの状況を克服した。

発掘調査の段階で、手のひらサイズより大きな遺物を光波測距儀とコンピュータによるトータルステーションで位置を記録したが、その他の小形サイズの遺物についても、5mグリッドを4分割し、2.5m四方の区画を単位として、表面から10cmごとに遺物をまとめて取り上げる方式をとった。黒曜石製品についても、2.5m四方の範囲で10cm単位での出土レベルの確認が可能である。

そこで、まず出土位置を記録した遺物から住居跡覆土内の垂直分布の状況を把握した（第1図）。いずれの住居跡でも3層に区分可能である。当該期とそれ以前の土器片のみを含む中層と、当該期以降の土器片が含まれる上層、遺物がほとんど分布しない床面に接する下層である。11号住居跡の場合、下層は住居跡の壁にそって分布し平面でみるとドーナツ状になる。中層は住居跡中央部で床に接しており、中層の最大厚が50cm前後と厚い。上層は東側に傾斜しており、30cm程度の厚さで、曾利式期までの土器片を含む。



遺物分布図の記号凡例

土器

- △ 諸磯 b・c 式
- 五領ヶ台式
- 角押文のある土器（猪沢式）
- 三角押文のある土器（新道式）
- 幅広押文のある土器（藤内式）
- ▣ 半肉彫文のある土器（井戸尻式）
- * 曽利式
- 時期不明

第1図 酒呑場遺跡I区11号住居跡の遺物分布図

曾利式期や井戸尻式期の土器片が各1点ずつ、床面近くにあるが、中期の集落形成時期に開けられたピットなどに落ち込んだものと判断される。こうした土器片の分布状況から、石器などの遺物も、土器片の示す時期のものと理解することができる。諸磯 b 式期は、それ以前には大規模な集落の形成はみられないため、ほぼ純粹にその時期の遺物群と判断される。この他の時期についても中層の把握が可能であり、中層出土品の比較によって石鎌や打製石斧などの時期変化を捉えることができた（保坂2005）。

ただし、その意義付けであるが、この中層遺物群が住居跡の住人の生活期間に係る遺物群であるかは論議があるところであろう。住居跡覆土中出土遺物群は、一括出土土器のように、住居が廃絶された後の窪地に廃棄されたものであるという解釈が一般的である。下層の無遺物層について住居廃絶後、上屋構造を取り去り放置された間に、住居の壁の崩壊や、風性堆積、降雨による流入などで形成された土層であるとする。しかし、酒呑場集落のように、遺物を多量に含む覆土をもつ住居跡や土坑が密に分布する集落で、他の遺構を壊して構築される住居の覆土に無遺物の層を形成することが可能であったか疑問である。

報告書では、下層の形成と中層の形成とを一体のものとして考えた。それは、屋根を土葺きとするような構造を想定し、廃絶時に柱を抜いて上屋をたたみ、竪穴の中に落ち込ませる状況を考えた。土葺きは木材や木の枝、草等の屋根材の上に葺かれたものと想定されるが、廃絶後に屋根材がフルイの役目をして土壤粒子のみが屋根材と床との間隙に堆積したり、屋根材の中に土だけが入り込むことも考えられる。土葺きの土の中には遺物が入り込むとともに生活期間の中で廃棄されたものも鋤き込まれたものと思われる。それが中層となって把握されることになるものと思われる。廃絶後、土葺きの上に遺物が廃棄され、他の時期の遺物と混合する上層を形成したものと思われる。

こうした考え方からすると、住居覆土中出土遺物群の内、中層のものは当該住居の住人が生活している間に廃棄した遺物が遺物群の主体となることになる。

ここでは、まず諸磯 b 式期の11号住居跡の石核を記載し、分類を行う。その後、酒呑場遺跡 I 区の他の住居跡出土石核についても比較検討を行い、時期変化のありようを検討する。資料としたのは諸磯 b 式期では 2・18・22 号住居跡、五領ヶ台式期では 6・30 号住居跡、猪沢式期では 16・19 号住居跡、新道式期では 12・29・32 号住居跡、藤内式期では 5・10・20・33 号住居跡、井戸尻式期では 3・25・38 号住居跡、曾利式期では 13・21 号住居跡である。いずれも、遺物垂直分布を検討し、中層出土遺物のみを抽出して資料化した。また、剥片や原石についても言及し、縄文時代の剥片剥離手法の実態について迫りたい。

3. 石核の観察記載

第2図 1 は板状の石核である。剥片剥離作業面である a 面全体は、原石の表面を構成する面の内、最も広い面が選択されている。2枚の剥離面が d 面を打面として剥離されている。左側の広い剥離面は a 面端部の底面を剥ぎ取り、剥片はウートラパッセとなったと思われる。右側面も折れたような剥離であるが、この剥離に連続する剥離面である。打面である d 面は、自然面のズリ面である。奥行きのない横長の打面で、長軸方向の辺の左よりを打撃している。a 面右端部に d 面を打面とする剥離面がかろうじて残存している。この打撃部は打面の右端にある。同一打面から 2 枚以上の剥片剥離を行ったものと思われる。流紋岩の夾雜物

を多く含む不透明漆黒色の黒曜石である。

第2図2は板状原石を用いた石核で、剥片剥離作業面はa面の1面だけに限定される。ズリ面の横長打面であるd面の長軸の右側に偏った部分を打撃している。この剥離はb面にまでおよび、石核側辺を折り取るような剥離となつた。この剥離以前にa面左下方からc面を打面とする打撃がみられるが、比較的小形の剥片が剥離されており、自然面の状況からも深く剥離が進んでいないので、まともな剥片は剥離されなかつたものと思われるが、一つの作業面に対して、打面を変えて多方向から剥片剥離作業を行つてゐる。d面を打面とする大きな剥離以前と思われる剥離がa面右下部に1枚残存している。周囲の自然面の状況から、d面を打面とするこれらの2枚程度が剥離された枚数と思われる。黒シマ入りのズリ面をもつ黒曜石である。

第2図3は板状の石核で、表裏両面に剥片剥離作業面がある。a面の剥離は横長の原石ズリ面であるd面を打面とし、横長打面の長辺ほぼ中央部を打撃して、a面のほぼ全体を剥離している。剥片剥離作業面の周囲はすべて自然面であり、剥離が深く進んでいない。

裏面のb面では、a面右側の自然面を打面とする剥離と、a面下側の自然面を打面とする2方向の剥離が見られる。まず、a面右側の自然面の下側を打面とした剥離が行われる。その剥離面を立てて打面を見ると、横長の打面であり、その長辺の片側に偏った部分を打撃している。この剥離の端部側に、同じ打面からの剥離面がかろうじて残存していることから、以前に剥離作業がなされていた可能性がある。

次にb面右側の剥離面が、打面を90度転位してa面下方の自然面を打面として剥離される。打面側に小規模な剥離があり、剥離端部側と段をなしているが、周囲の自然面や剥離面との関係をみると、同一打撃で剥離されたと考えられる。打面は横長の自然面で、その短辺を打撃している。

最後の剥離は、最初の剥離と同じ自然面打面に再び転位し、横長打面長辺の片側を打撃している。

いずれの剥離でも打点は明確でなく、リップの発達するものもあり、軟らかい素材のハンマーを用いた可能性がある。黒シマの入った黒曜石で、自然面はズリ面である。

第2図4は大きな原石を分割したと思われる分割面が、d面とc面上半部にみられる。この石核の大きな特徴は、最後に剥離されたa面右端でb面におよんでいる剥離面である。d面の分割剥離面を打面としている。その面は横長で、長辺の右端部を打撃している。非常に強い力で打撃されたと思われ、石核の端部を剥ぎ取り、剥片はウートラパッセとなっていると思われる。

この剥離以前に同一打面で剥離がなされている。剥離は石核中央部で止まり、ヒンジフラクチャーとなつてゐる。同一打面の左端部を打撃してもう一枚剥離がなされるが、前2者とは違ひ小規模な剥離である。

これらの剥離面の剥離方向とは反対方向の剥離がみられる。おそらくc面の下方の剥離面を打面としたものと思われる。したがつて、a面は複数方向の剥離作業面である。

c面下方の剥離面は2枚の大きな剥離面の端部であり、剥片剥離作業面の存在を推定させる。この面を打面として細かな剥離群がc面からa面下部にかけみられる。打撃点が潰れており、比較的硬い素材に押しつけたような剥離群である。

透明な黒曜石で、自然面は円礫転磨面である。

第2図5は、a面の剥離面の内、d面の自然面を打面とした剥離は、反対面を剥ぎ取るウートラパッセ剥片を生み出したと思われるものである。周囲の自然面の状況から、この剥離以前にはあまり多くの剥離がなされていないものと思われる。a面右下部にはc面を打面とする小規模な剥離がみられ、端部が前記の剥離面を切っている。

a面の裏面のc面でも、d面を打面とした剥離が見られる。この剥離はa面の剥離に端部を切られており、a面の剥離以前に剥離されたと考えられる。また、右側端部が段をなしている。c面左下にはa面を打面とした小規模剥離がみられ、前記の剥離に切られており、さらにa面の小規模剥離にも切られている。c面右下部にも剥離面があるが、風化の進んだ古い剥離面であり、原石段階からみられたものと思われる。転磨による風化自然面を持ち、くず湯状の不透明黒曜石である。

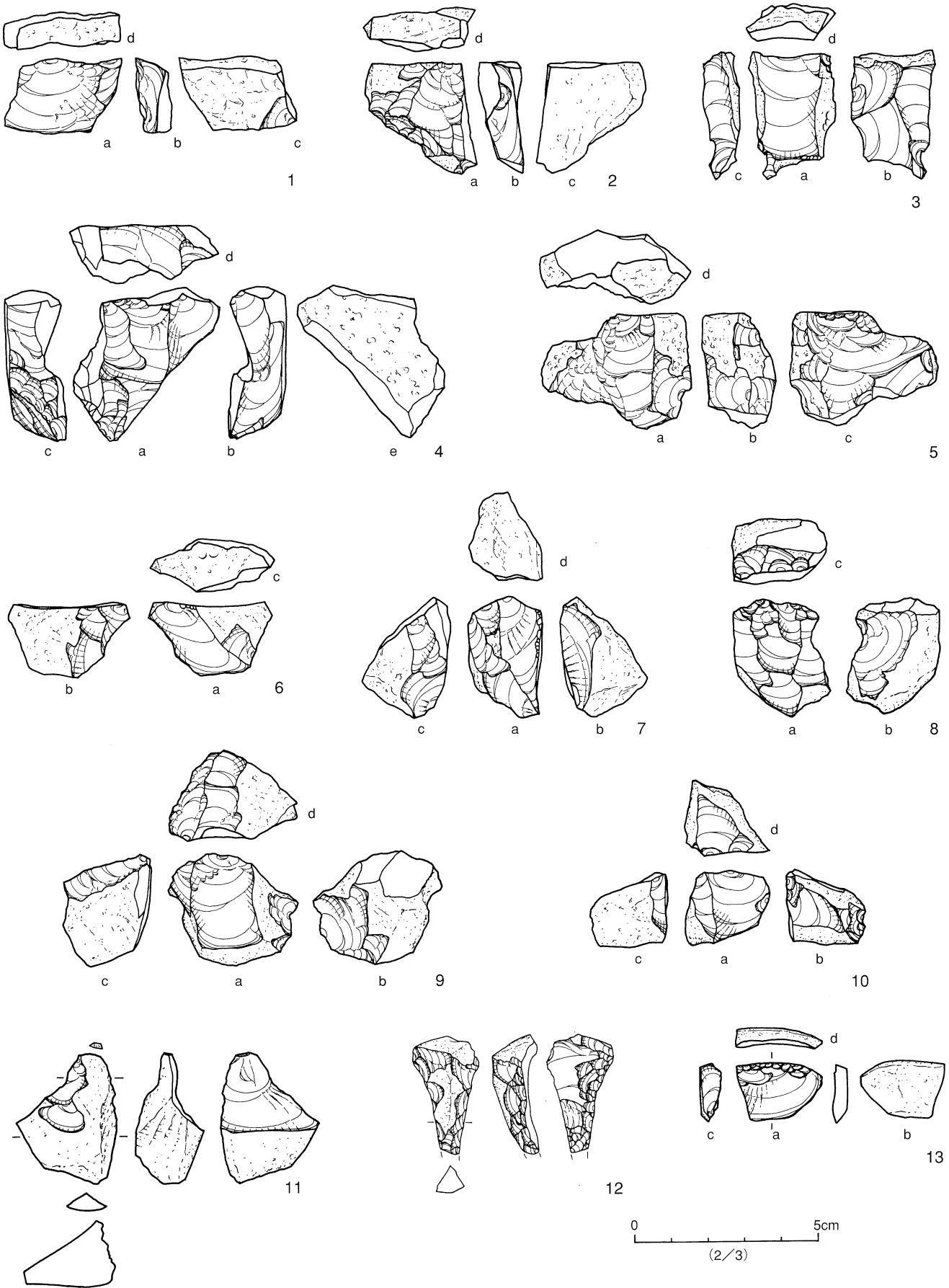
第2図6は、小形の原石の表裏に剥離作業面をもつものである。a面左側では、c面の横長自然面を打面としたウートラパッセ剥片を生み出したであろう剥離がみられる。a面左上方部に自然面が残つており、原石の端部を剥離していることが分かる。a面右下にはb面下部の自然面を打面とした小規模剥離がみられる。

この裏面のb面では、c面の横長打面の端部を打面とした剥離がみられるが、a面の剥離に大きく切り取られている。それ以前の剥離としてb面右端方向からの打撃で、前述の剥離と直行する方向の剥離がなされている。白シマが若干入る透明な黒曜石で、自然面はズリ面である。

第2図7は、これまで記載した石核とは違い、塊状の原石を用い、奥行きのある打面をもつてゐる。a面では上下両方向からの剥離面がみられる。剥離作業面の中央部に自然面が残存し、剥片剥離があまり深く進んでいないものと思われる。一方、b面ではこれらの剥離作業で失われた打面からの大きな剥離の端部が残存している。白シマの入る半透明黒曜石で、ズリ面の自然面である。

第2図8は塊状の原石の3面に剥片剥離作業面が設定されている。最も剥離作業が進んだa面では、同一打面から4枚以上の剥片が剥離されている。最も古い石核下端部の剥離面は両側に自然面があり、背面全体に剥離面をもつ最初の剥離であった可能性がある。a面左側面は全面自然面である。a面の打面であるc面はa面側を打面とする比較的小規模な剥離からなる。また、b面はa面を打面とした1枚の剥離面である。自然面の残存状況から、残存する剥離面以上に石核消費が進んでいる状況は見受けられず、ほぼ原石の大きさの状態である。

第1図9は、塊状の原石を素材としている。a面中央部



第2図 酒呑場遺跡Ⅰ区11号住居跡出土石核と関連石器

の大きな剥離は d 面の剥離面を打面としているが、a面左端部の剥離は d 面左側の剥離に切られており、a面、d 面の各剥離が打面転位しながら剥離された状況が把握できる。いずれの面も自然面の残存状況から、あまり深くは剥離作業が進んでいないものと思われる。b 面では自然面を薄く剥ぎ取るように剥離がみられるが、a面下部の自然面を打面として 2 枚程度が剥離されている。

第 1 図10は塊状の石核である。a面に d 面を打面とする同一方向の剥離が 2 枚みられる。他の作業面では、微細な剥離を除くと、b 面、d 面において 1 枚のみの剥離がみられ、自然面の状況からあまり深くは剥離作業が進んでいなかったものと思われる。白シマの入る半透明の黒曜石で、自然面はズリ面で、7・8・9 も同様の黒曜石である。

4. 剥片剥離手法の復原

剥片剥離手法の復元にあたり、まず石核を類型化したい。形状では板状で横長の奥行きのない打面をもつもの（第 2 図 1～6；I 類とする）、塊状で奥行きのある打面をもつもの（第 2 図 7～10；II 類とする）とがある。I 類にはまるで爪のように薄く小形のものがあり（第 2 図13、諸磯式 b 期の23号住居跡上層出土）、打撃時の特殊な石核保持法の存在が推定される。集計を行う際には、板状は幅が厚さの 2 倍以上のものとした。また、図示はしなかったが長さが幅の 2 倍以上のものを棒状石核（III 類）とした。11住中層出土石核は17点あり、I 類5点、II 類は12点である。

次に剥片剥離作業面を類型化すると、1 打面からの剥離面のみで構成される单一方向作業面をもつもの（第 2 図 1・3・8～10；a 類）、同一作業面を複数の方向から剥離する複数方向作業面をもつもの（第 2 図 2～7；b 類）、打面転位があり作業面を複数もつもの（第 2 図 3～10；c 類）がある。実際は 3 者の組み合わせである（第 1 表）。

第 1 表で、各時期の類型別の出現状況をみると、形態では塊状の II 類が板状の I 類に比べやや多い状況で、各時期とも I 類が 4 割前後、II 類が 5 割前後あり、III 類が 1 割程度あるという状況である。剥片剥離作業面の分類では、a 類が 8 割前後の石核にみられ、b 類が 4～5 割、c 類が 6～7 割程度みられるという状況である。組み合わせ状況では、石核の形態にかかわらず、a 類が何面かみられるもの（ac 類）、a 類と b 類が組み合わざるもの（abc 類）が最も多く各時期でみられる。b・b c 類の少なさが目立ち、同一作業面を複数方向から剥離する作業面である b 類は、それだけで出現することが比較的少なく、a 類と組み合わざって出現することが多い傾向が各時期の状況として言える。

そこで11号住居跡中層出土の剥片62点について、背面構成状況を観察してみた。背面が自然面のみのものが 6 点で、剥離面をもつものが圧倒的に多い。背面に剥離面をもつものの内、主要剥離面と同一方向の剥離面だけものが25点 45%で、複数方向の剥離面をもつものが31点55%と過半数を占めている。石核では同一方向の剥離面である a 類が 8 割前後に見られる点と矛盾するように思われるが、作業面を

大きく剥ぎ取ってしまうため、剥離の履歴が剥ぎ取られてしまう状況が多いことが推定できる。

なお、複数方向の剥離面をもつものの剥離方向は、主要剥離面と同一方向の剥離面がみられるものが18点58%ある。他の方向では、右方向からが11点36%、左方向からが14点45%、反対方向からが11点36%で、同一方向より少ない。同一方向だけの剥離面を含めると43点77%に同一方向の剥離面がみられる。同一打面で複数回剥離する機会が多くなったことを推定させる。2 枚以上の剥離で剥片中央部に厚みを持たせたり、剥離面の切り合いによる鋭い刃縁部を確保したものと思われる。

しかし、剥離面のみで構成される背面を持つ剥片は21点34%と約 1 / 3 で、背面に自然面をもつものが過半数を占めている。背面の自然面が 5 割以上の被覆率のものが24点39%で、この内全面自然面のものも 6 点10%ある。複数回の剥離作業を同一打面の同一作業面で行うことがままあるが、自然面が剥片に残ることが多く、剥離の枚数も限定的であったものと思われる。

ところで剥片の打面は厚みが薄いものが多く、点状打面が 8 点ある。これを含めて厚さ 1 mm のものが12点で 3 mm までのものが22点で打面の残存する剥片38点の中の過半数を占める。厚さ 3 mm 以内の打面の長さは 1 cm 以内である。剥片の過半数は小さな打面が求められたと思われる。これは、石鎌の素材を意識したものと考えられる。

11号住居跡の石核は、自然面の残存状況からみて、あまり深くは作業が進んだ形跡がなく、1 作業面で 2～3 枚程度の剥片が得られた程度と思われる。そこで、いずれの作業面においても自然面が残存するものを、あまり深く作業が進んでいない石核として把握し、各時期の状況を見てみた。諸磯式期で76%と最も多く、五領ヶ台式期36%、新道式期30%、猪沢式期27%、藤内式期32%、井戸尻式期34%、曾利式期39%という状況である。諸磯式期が他の時期の倍近くを占めている。小形の原石を剥離するため 1 枚の剥離で一つの面全体が剥離されてしまう状況が多々あり、自然面が残らない作業面が多くなることも考えられる。しかし、特に諸磯式期で、剥片剥離をあまり深く行わずに廃棄する傾向が強いことは認識する必要がある。

剥離面の特徴として、石核底部を剥ぎ取った、ウートラパッセ剥片を生み出したであろう剥離が目をひく。本住居跡中層出土の剥片中にウートラパッセ剥片がみられるが、折れているため、諸磯 b 式期の23号住居跡中層出土で、黒曜石製ウートラパッセ剥片を図示した（第 2 図11）。原石の角の部分をねらって打撃したものと思われ、横断面が三角形状を呈する。打面が小さいため、打面側に先端部をもつ石錐の素材となりうる。第 2 図12（2 号住居、諸磯 b 3 式期、上層出土）を石錐の素材としての使用例として提示しておく。

各時期の石核底部を抜くような、ウートラパッセ剥片を剥離したと思われる剥離面のある石核は、諸磯式期で64%、五領ヶ台式期で57%、猪沢式期で50%、新道式期で50%、

第1表 酒呑場遺跡I区の石核類型

時期	I	II	III	I a	b	c	I a	I ac	I abc	I b	I bc	II a	II ac	II abc	II b	II bc	III a	III ac	III abc	III b	III bc
諸磯式期	14	17	3	29	17	26	2	5	5	2	0	2	7	5	2	1	0	1	2	0	0
%	41	50	9	85	50	76	6	15	15	6	0	6	21	15	6	3	0	3	6	0	0
五領ヶ台式期	7	7	0	11	9	9	2	2	2	1	0	0	1	4	2	0	0	0	0	0	0
%	50	50	0	79	64	64	14	14	14	7	0	0	7	29	14	0	0	0	0	0	0
猪沢式期	2	6	21	7	5	51	0	1	0	1	0	1	2	2	1	0	1	0	0	1	0
%	20	60	20	70	50	50	0	10	0	10	0	10	20	20	10	0	10	0	0	10	0
新道式期	9	15	2	24	10	16	4	2	3	0	0	3	5	5	1	1	2	0	0	0	0
%	35	58	8	92	38	62	15	8	12	0	0	12	19	19	4	4	8	0	0	0	0
藤内式期	18	22	4	39	16	31	2	6	7	3	0	5	12	3	2	0	1	2	1	0	0
%	41	50	9	89	36	70	5	14	16	7	0	11	27	7	5	0	2	5	2	0	0
井戸尻式期	12	16	4	27	12	18	7	2	1	2	0	3	7	5	0	1	0	1	1	2	0
%	38	50	13	84	38	56	22	6	3	6	0	9	22	16	0	3	0	3	3	6	0
曾利式期	15	17	1	29	12	23	4	4	4	0	3	5	7	4	0	1	1	0	0	0	0
%	45	52	3	88	36	70	12	12	12	0	9	15	21	12	0	3	3	0	0	0	0

藤内式期で43%、井戸尻式期で34%、曾利式期で39%と、時期を追うごとに漸減している。これは、ウートラパッセ剥片を必要とする石錐が、あまり作られなくなった可能性がある。これと関連して、酒呑場遺跡では石錐の長さが、諸磯式期から五領ヶ台式期で4cm台が最大であったのが、猪沢から藤内式期で3cm台、井戸尻から曾利式期で2cm台と小形化する傾向があり、この石錐の変化に対応している可能性がある。

次に石核の大きさを、長さの数値を用いて検討してみる(第3図)。諸磯式期では3~3.4cmの区間が最も多く、6cm大のものが最も大きい。五領ヶ台式期から新道式期では2.5~2.9cmの区間が最も多くなり最大は5~5.4cmの区間にある。藤内式期から井戸尻式期にかけては前段階と同様に2.5~2.9cmの区間が最も多いが最大の区間が4.5~4.9cmと縮小化する。曾利式期も最大区間は同じであるが、次に多い2~2.4cmの区間が各時期で漸増し、この段階で最も多い割合を占めるようになる点が注目される。時期を追うごとに、小形の石核の占める割合が大きくなっていることができる。なお、長さと幅の関係についても散策グラフを第3図に示しておく。

そこで、原石の長さについても検討したい(第4図)。把握できた資料数が少ないため、グラフにはばらつきがでてしまい、十分な成果とはいえないが、諸磯式期は他の時期に比べて大きいものが多い傾向はあるものと思われる。以上の検討結果からして、石核の小形化傾向は、剥離作業が進んで小さくなるというよりも、原石自体が小さいものが好まれる傾向があったものと推定される。

5.まとめと展望

旧石器時代の石刃技法などの剥離手法は、剥片剥離作業において前の剥離でできた剥離面を意図的に剥片に取り込んで一定の形態の剥片を一定の手順を踏んで量産するような手法であるが、今回分析した縄文時代の黒曜石剥離手法はそうしたものではない。石核は長さが2~3cm程度の小形のものが多く、同一剥離作業面では2~3枚の剥片を剥離する程度で、他の作業面に打面転位し、あまり石核を深く剥離作業を進めない。もともとの原石の大きさが小形

であるためと思われ、大きな原石を消費して小形化していく旧石器時代の剥片剥離手法との違いを示すものである。

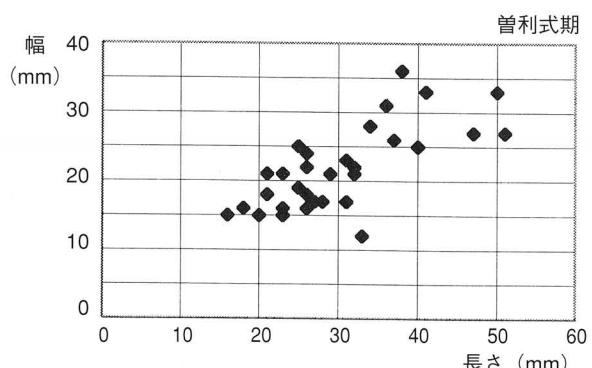
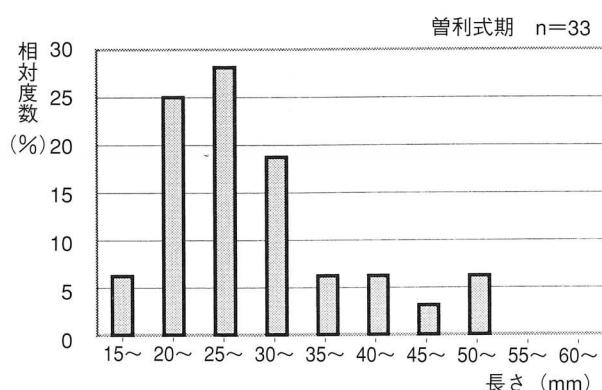
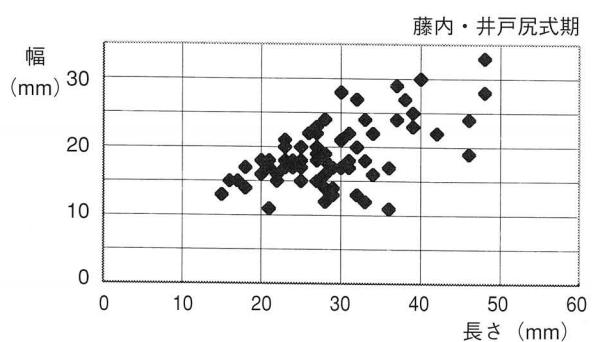
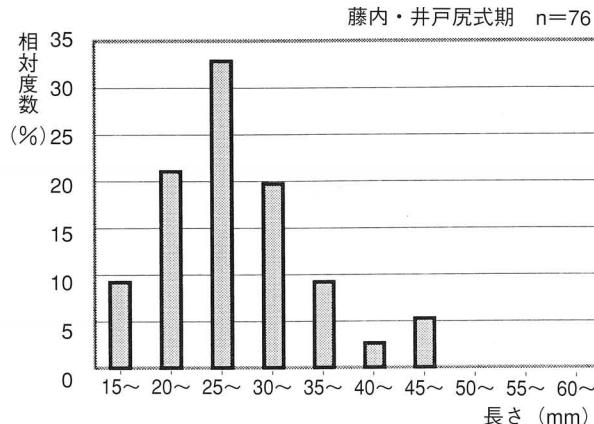
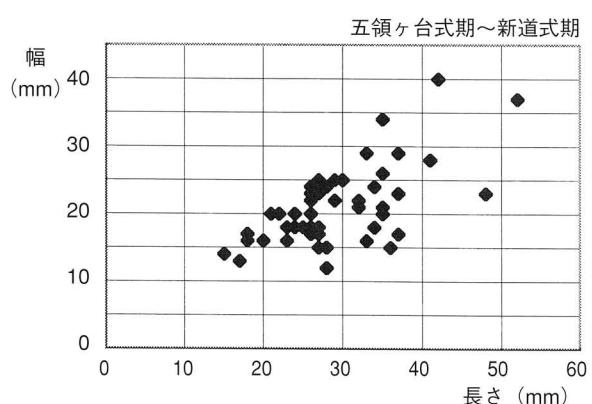
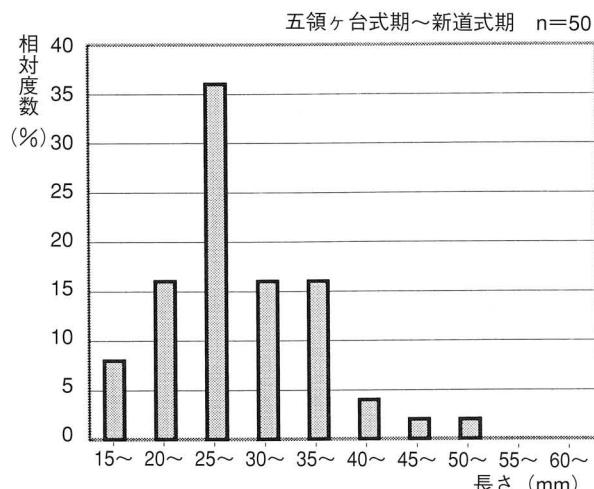
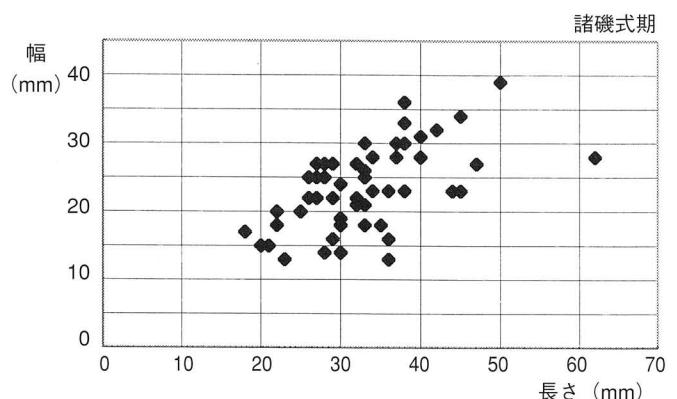
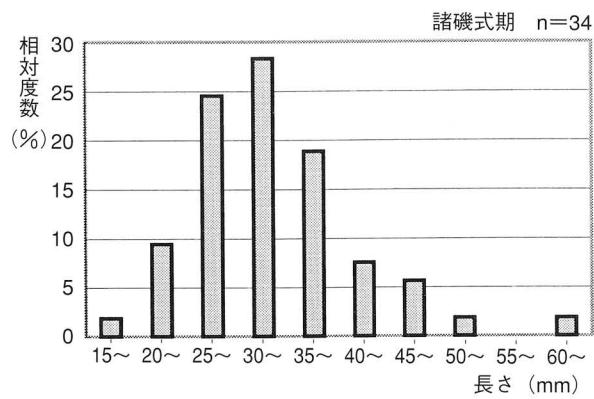
剥片剥離の目的は、石鎌、石錐、楔形石器、使用痕ある剥片などの素材となる剥片の剥離であり、それぞれ目的とする剥片の形態は異なる。使用痕ある剥片は最も多い石器と言えるが、その形状は一定しない。厚みのある縦長剥片をみかけるが、これなど刃部を利用するための剥片と思われる。ただし、自然面があばた状の原石では鋭い縁辺が得られないため、剥離を重ねて前の剥離で得た面と交差する縁辺を刃部として得るか、自然面がズリ面の原石を利用してズリ面と腹面とのなす鋭い縁辺を得たものと思われる。ズリ面は剥離面に近いなめらかな面なので、複数枚の剥離を行わなくとも鋭い縁辺が得られることから、好んで用いられたものと思われる。

一方、石鎌の素材の場合は、比較的薄く、断面が紡錘形で、平面が三角形状の貝殻状剥片が目的剥片となったと思われる。剥片の周囲に厚みがあるものは不向きであり、当然、ウートラパッセ剥片などは石鎌以外の目的で剥離されたものと考えられる。なお、黒曜石製の石匙については、大型の製品があり、ここで示したような石核から剥離された剥片では製作不可能である。大型の剥片を入手して製作したか、製品の状態で入手したものと考えられる。

特筆すべきは、石核底部を剥ぎ取るようなウートラパッセ剥片が剥離されている点である。この剥片は、おそらく石錐の素材となったものと思われる。石錐の小形化に対応して、ウートラパッセ剥離の減少や石核の小形化といった傾向も読み取れた。

板状石核の存在も注目される。奥行きのない横長の打面で、極端なものは爪のように小形で薄い。これらを剥離するには、打撃時の石核の保持方法を相当工夫しなければならないだろう。ウートラパッセ剥片の剥離も含め、剥離が石核下端に抜けるように、背面と側面の3点を保持して、打撃による衝撃を受け止めたものと思われる。第2図1・2にみられるような折れたような横割れも、側面の強力な縛縛によって発生した可能性がある。これは、小形の原石に適応した剥離手法とみることができる。

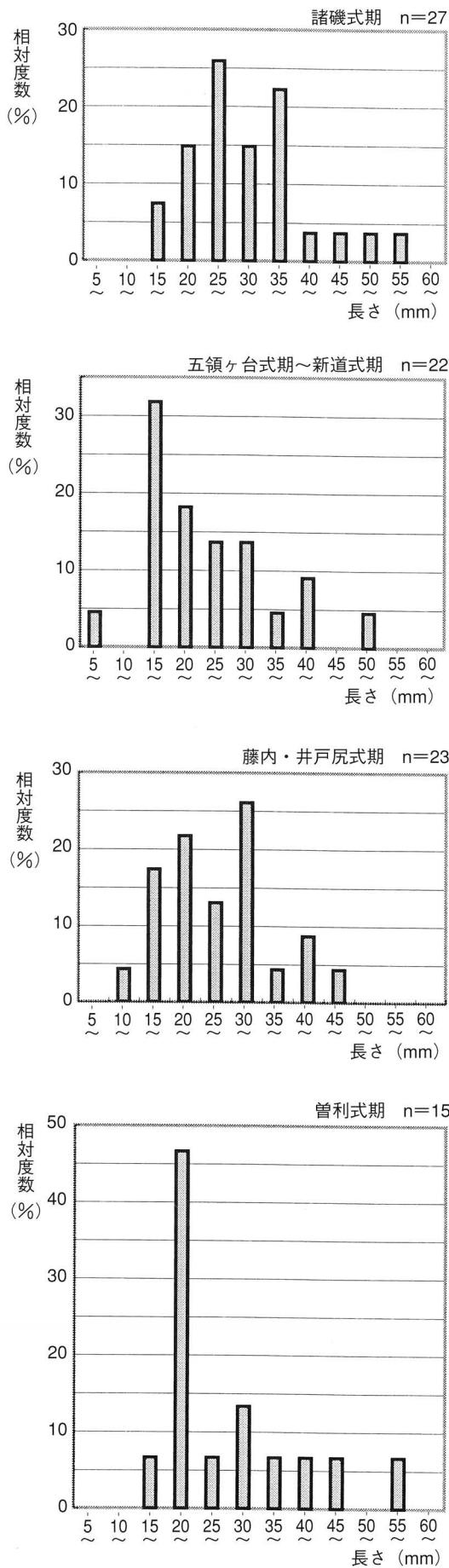
縄文時代の剥片剥離は、得られた素材を加工することに



長さ構成グラフ

長さと幅の関係グラフ

第3図 酒呑場遺跡I区出土石核の長さと幅



第4図 酒呑場遺跡Ⅰ区出土の原石の長さ

重点が置かれていたため、旧石器段階のような一定の形態の剥片剥離はなされなかつたとされる。実際、一定の手順を踏んで剥片を量産する姿は見受けられず、一時に多量に石器生産するという状況に対応した剥離体系でないものと思われる。しかし、石錐素材のウートラパッセ剥片や、石鏃素材を意識して、打面を極力小さくした剥離など、使用や加工の便を意識したある種の要件をもつ目的剥片がいくつかあり、しかも一つの石核から複数種類を剥離している。特定の器種が1・2点と臨機的に必要とされるため、その時に応じて石材をとりだし、必要とする要件を満たす剥片が剥離できる面を見極め、しっかり固定して1・2枚程度の剥片を確実に剥離して行く。そうした姿が想定できる。一時に多量の剥片を剥離して多量の石器をストックするということではなく、補填が必要になった時に少数作り替える程度のものであったと思われる。それだけに、原石も小型で良かったと思われる。しかし一方で、原石は多量に原石状態で廃棄されている状況がある。これら原石が剥離できないからではなく、一定期間に原石群が交代した可能性も考えられる。こうした、原石の供給体制も含めて、信州系黒曜石の剥片剥離体系は理解されねばならないであろう。

引用文献

- 田中英司氏 1977 「縄文時代における剥片石器の製作について」『埼玉考古』16号
- 山田昌久氏 1985 「縄文時代における石器研究序説—剥片剥離技術と剥片石器をめぐって—」『論集 日本原史』
- 保坂康夫 1990 「結語」『丘の公園第5遺跡』山梨県教育委員会・山梨県企業局
- 大工原豊氏 1996 「縄文時代(2)石器」『考古学雑誌』第82巻第2号
- 町田勝則氏 1996 「石器の研究法—報告文作成に伴う観察・記録法(1)ー」『長野県の考古学』(財)長野県埋蔵文化財センター研究論集1
- 長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団 2000 『鷹山遺跡群IV』
- 竹広文明氏 2003 『サヌカイトと先史社会』
- 保坂康夫 2005 「I区の石器」『酒呑場遺跡(第1~3次)ー酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書(遺物編ー本文編ー)ー』
- 酒呑場遺跡の報告書は、山梨県教育委員会・山梨県農務部 1997 『酒呑場遺跡(第1・2次)ー酪農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書(遺構編)ー』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第135集など7冊刊行された。